

中条小学校遺跡 (CJS12 - 1) 調査出土遺物 (補遺)

木村 健明

1. はじめに

中条小学校遺跡 (CJS12 - 1) 調査は、立命館大学おおさか茨木キャンパス建設に伴って行われた発掘調査である。調査成果は平成 27 年 10 月に報告書として刊行した (茨木市教育委員会 2015)。その後、出土遺物の収納作業を行う過程で、遺跡の位置づけを考える上で重要な遺物を新たに確認した。本稿で補遺として、それらの遺物について報告する。

2. 遺物

本稿で報告する遺物は、有舌尖頭器 1 点、凹基式石鏃 1 点、石庖丁 1 点、鉄鏃 1 点、形象埴輪 2 点、製塩土器 1 点、緑釉陶器 2 点の合計 9 点である。今回の報告では、報告書との混同を避けるため (報告書では 516 番まで使用)、517 番から付与する。

また、グリッド配置や遺構などの詳細については、報告書を参照していただきたい。

有舌尖頭器 (517) C 区 32 グリッド S K 3138 から出土した。サヌカイト製で、長さ 6.7cm、幅 2.5cm、厚さ 1.7cm、重量 14 g である。返し部分は片側では明瞭で鋭利である。しかし、反対側の刃部は未調整であり、返し部分に相当する箇所が欠損していることから、加工時に破損した未製品の可能性がある。

石鏃 (518) C 区 33 グリッド第 2 面直上から出土した。サヌカイト製で、長さ 2.1cm、残存幅 1.7cm、厚さ 0.3cm、重量 1 g である。凹基式石鏃で脚部の片側が欠損する。明確な時期比定はしがたいが、形状からみて縄文時代～弥生時代にかけてのものと思われる。

石庖丁 (519) 表採資料で地区・グリッドなどは不明である。粘板岩製で、残存長 4.5cm、残存幅 4.7cm、厚さ 0.5cm、重量 17 g である。紐孔の一部が残存し、刃部が形成される。弥生時代中期のものである。

鉄鏃 (520) A 区 7 グリッド第 2 面精査時に出土した。残存長 2.7cm、幅 1.2cm、厚さ 0.5cm、重量 2 g である。有頸鏃の鏃身部のみが残存し、頸部・茎部は欠損する。鏃身外形は柳葉形、断面

は片鏃造、鏃身関部はナデ関をそれぞれ呈する。古墳時代中期後半のものである。古墳の副葬品の可能性が考えられる。ただし、出土地点では古墳を検出していないため、周辺に構築されたいずれかの古墳に副葬されていたものが、埋葬施設の削平によって移動した可能性がある。

形象埴輪 (521・522) 521 は B 区古墳 6 南東側周溝から出土した。残存高 5.7cm、残存幅 7.2cm を測る。色調は橙色であるが、中央に幅 1.5～2.0cm の帯状に浅黄橙色を呈する部分が認められる。当初はこの部分に別の粘土板が貼り付けられていたものが、剥離したと考えられる。球形を呈する形状から鳥形埴輪の頭部などの可能性が考えられる。522 は B 区 22 グリッド第 2 面精査時に出土した。盾形埴輪の端部である。色調は橙色を呈する。上下は定かではない。残存高 7.0cm、残存幅 5.6cm、厚さ 1.3cm を測る。表面に 2 条の沈線を「L」字状に施す。

製塩土器 (523) A 区 9 グリッド S P 0321 から出土した。残存高 5.2cm、厚さ 1.1cm を測る。内面に細かい布目圧痕が認められ、外面は被熱によって荒れている。色調は外面が黄灰色、内面が灰黄褐色を呈する。S P 0321 からは他に土師器小片が出土しているのみであるため、確実な時期比定はしがたいが、器壁が厚いことと、内面に布目圧痕が認められることから、古代の範疇に収まると思われる。

緑釉陶器 (524・525) 524・525 とも胎土が青灰色を呈する硬陶である。524 は C 区 32 グリッド古墳 1 南西側周溝から出土した。残存高 1.1cm、底径 6.6cm を測る。削り出しの蛇の目高台をもつ。高台内の中央部は浅く一段窪む。釉はオリーブ灰色を呈するがほとんど剥落し、外面の窪んだ部分と内面の一部に僅かに認められる程度である。525 は B 区 20 グリッド第 2 面精査時に出土した。同一個体と考えられる 2 つの破片で図上復元を行った。口径 19.0cm、器高 5.1cm、底径 7.6cm を測る。高台は削り出しの輪高台で、断面形状は台形状を呈する。口縁部は外方へつまみ出す。内面見込みに微かに圈線が認められる。また

一部に窯着痕跡も認められる。釉は内外面全面にかかり、オリーブ灰色を呈する。いずれも形状からみて9世紀代のものである。

3. まとめ

以上、報告書刊行後に新たに確認した遺物の内、重要と思われるものを追加報告した。

有舌尖頭器は報告書において1点報告しており、遊離資料ながら2点目となる。

縄文時代から弥生時代中期にかけては遺物の出土量が少なかったが、新たに石鏃や石庖丁を確認した。

報告書に掲載した形象埴輪は、本来の形態が不明な破片が多数を占めている。同じく破片ではあるが、本来の形態を推定しうるものを新たに報告した。埋没古墳に樹立されていた埴輪の様相を窺うことができよう。

鉄鏃は鏃身部のみではあるが、古墳の副葬品の可能性が考えられる。中条小学校遺跡ではこれまでに複数の埋没古墳を検出しているが、いずれも埋葬施設は削平されており、周溝のみの検出である。鉄製品が副葬されていた可能性を想定できることは構築された古墳群を考える上でも重要となるだろう。

器壁の厚さや布目圧痕といった特徴から、古代の可能性のある製塩土器片を確認した。その他に2点確認した緑釉陶器の存在も合わせて考える

と、この時期の集落の性格が一般の集落とは異なるものであった可能性も考えられる。

これまでに南東側に近接する調査区（平成14・15・18年度調査）で計画的に配置されたと考えられる古代の建物群（8～10世紀）が確認されており、今回出土した古代の遺物はこの集落に伴うものと考えられる。

いずれも小片ではあるが、これらの遺物によって、各時期の中条小学校遺跡の様相を窺うことができるようになるであろう。

参考文献（五十音順）

- 茨木市教育委員会 2003「中条小学校遺跡」『平成14年度発掘調査概報』pp. 5-10
- 茨木市教育委員会 2004「中条小学校遺跡」『平成15年度発掘調査概報』pp. 42-53
- 茨木市教育委員会 2007「中条小学校遺跡」『平成18年度発掘調査概報』pp. 1-30
- 茨木市教育委員会 2015『中条小学校遺跡発掘調査報告書』
- 水野敏典 2003「古墳時代中期における鉄鏃の分類と編年」『橿原考古学研究所論集 第14』八木書店 pp. 255-276
- 本田奈都子 1999「第2節 井戸424から出土した製塩土器」『駒ヶ谷遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター pp. 113-118

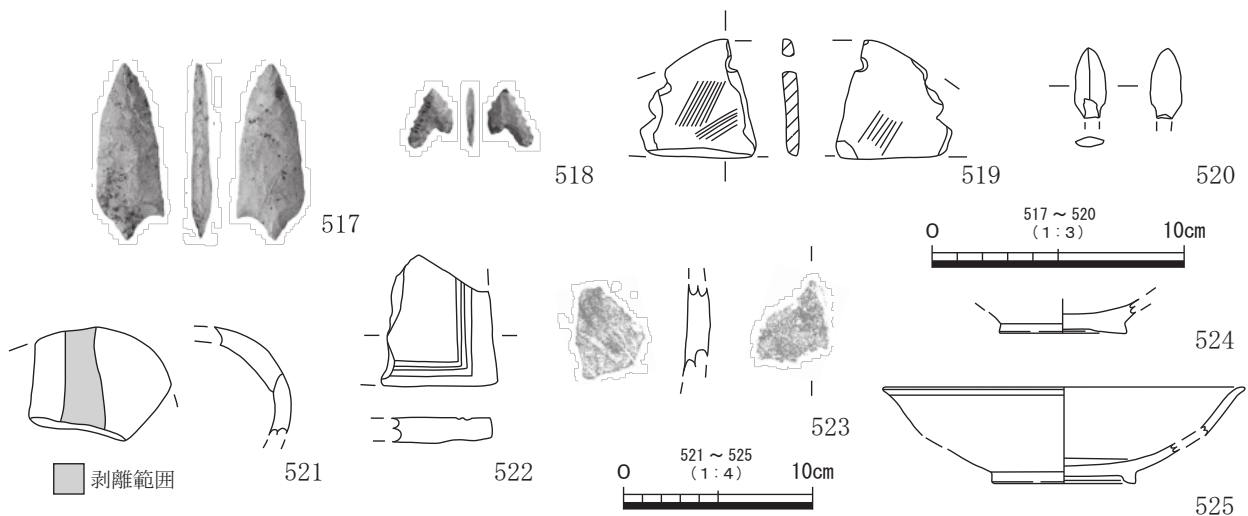


図1 中条小学校遺跡（CJS12-1）出土遺物